

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

こうどう ふ ま
行動・振る舞い

言と云うは、心の思いを響かして声を顕すを云うなり。
凡夫は我が心に迷つて、知らず覺らざるなり。仏は
これを悟り顕して神通と名づくるなり。神通とは、神
の一切の法に通じて礙り無きなり。この自在の神通は、
一切の有情の心にてあるなり。故に、狐狸も分々に通を
現ずること、皆、心の神の分々の悟りなり。この心の
一法より国土世間も出来することなり。

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

言動・振る舞い 713 ページ 7 行

しんに ぜんあく つう
瞋恚は善悪に通ずるものなり。

050 諫曉八幡抄
かんぎようはちまんしょう

げんどう
言動・振る舞い
ふる ま
742 ページ 1 行

ひがくしょう

り

い

たにん

どうり

されども「非学匠は理につまらず」と云つて、他人の道理

じしん

どうり

きし

あんしょう

もの

をも自身の道理をも聞き知らざるあいだ、暗証の者とは

い

り折

たと

いみず

云うなり。すべて理におれざるなり。譬えば、行く水に

数書

かずかくがごとし。

053 諸宗問答抄

しよしゆうもんどうしょう

げんどう

ふま

言動・振る舞い 772 ページ 2 行

しよ ことば っ
書は言を尽くさず、 言は心を尽くさず。 事々見参の時
ことば ことば ことば ことば ことば
を期せん。

151 太田入道殿御返事

おおたにゆうどうどのごへんじ

げんどう ふ ま
言動・振る舞い

1363 ページー1行

いっしょう あいだけん 一生が間賢なりし人も一言に身をほろぼすにや。

きょうだいししょう
(171 兄弟抄)

げんどう ふ ま 言動・振る舞い
1476 ページ 3 行

せんねん

刈

萱

いちじ

灰

ひやくねん

こう

いちごん

千年のかるかやも一時にはいとなる。

百年の功も一言に

破

そうろう

ほう

理

やぶれ候は、法のことわりなり。

ひようえのさかんどのごへんじ

さんしょうしま

こと

(176 兵衛志殿御返事 (三障四魔の事))

げんどう

ふま

言動・振る舞い 1487 ページ 5 行

せんねん

お

しげ

ひ

いちじ

はい

千年も生い茂ったかるかやでも、火がつけば一時に灰となつてし

ひやくねん

た

こうせき

ひとこと

まい、百年もかかつて立てた功績もわずか一言でやぶれてしまう

ほう どうり

ことは、法の道理です。

かえ がえ おんびん

返す返す穩便にして、あだみうらむる氣色なくて、身みを

婁 げにん 具

やつし下人をもぐせず、よき馬うまにもものらず、のこぎり・か

金 槌 て

なづち手にもち、こしにつけて、つねにえめるすがたにて

腰

笑

姿

おわすべし。

はちまんぐうぞうえいじ

187 八幡宮造営事

げんどう

ふ ま

言動・振る舞い

1508

ページー16行

ただいま ころろ

こと しゅつたいそうら

にゆうどうどの おんまえ

只今の心は、いかなる事も出来候わば、入道殿の御前

いのち

捨

ぞん

そうろう

ことそうろう

にして命をすてんと存じ候。もしやの事候ならば、

えちご

馳

のぼ

遙

うえ

ふじよう

越後よりはせ上らんははるかなる上、不定なるべし。たと

しよりよう

召

ことし

君

離

い所領をめさるるなりとも、今年はきみをはなれまいら

そうろう

せ候べからず。

205

しじようきんごどのへんじ

ちじんぐほう

こと

四条金吾殿御返事（智人弘法の事）

げんどう

ふ

ま

言動・振る舞い

1563

ページー6行

おな

歎

気色

じよう

書

されば、同じくはなげきたるけしきなくて、この状にか

詔

ふ

ま

おお

きたるがごとく、すこしもへつらわず振る舞い仰せあるべ

なかなか

悪

し。中々へつらうならば、あしかりなん。

しじようきんごどのごへんじ

ふかしやくしよりよう

こと

(208 四条金吾殿御返事 (不可惜所領の事))

げんどう

ふ

ま

言動・振る舞い 1583 ページ 11 行

いちだい かんじん ほけきよう ほけきよう しゆぎよう かんじん ふきようほん

一代の肝心は法華經、法華經の修行の肝心は不輕品にて

そうろう ふきようぼさつ ひと うやま

候なり。不輕菩薩の人を敬いしは、いかなることぞ。

きようしゆしやくそん しゆつせ ほんかい ひと ふ ま そうら

教主釈尊の出世の本懷は人の振る舞いにて候いける

かしこ にな い 果 無

ぞ。あなかしこ、あなかしこ。賢きを人と云い、はかな

ちく

きを畜という。

すしゆんでんのうごしよ さんしゆざいほうごしよ

(210 崇峻天皇御書 (三種財宝御書)

げんどう ふ ま

言動・振る舞い 1597 ページー13 行)

しやくそんいちだい せつぽう かんじん だいじ ほけきよう

釈尊 一代の説法の肝心 (もつとも大事なところ) は法華經で

ほけきよう しゆぎよう いちばんだいじ ふきようほん

す。その法華經を修行するうえで一番大事なのは不輕品なので

ふきようぼさつ

ひと うやま

す。不輕菩薩があらゆる人を敬ったのは、どういうわけなのか、よ

かんが

きようしゆしやくそん しゆつせ ほんかい う

く考えてごらんなさい。教主釈尊の出世の本懷（生まれてきた

もくてき

にんげん

ふ ま

おし

目的）は、人間としてどのように振る舞ったらいいかを教えること

み

かしこ

にんげん

だったのです。くれぐれも身をつつしみなさい。賢いものを人間と

おろ

ちくしやう どうぶつ

いい、愚かなものを畜生（動物）というのです。

こうし きゅうしいちげん しゅうこうたん よく とき さんど 握 しよく

孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度にぎり、食す

とき さんど 吐 たも いにしえ けんじん いま ひと 鏡

る時は三度はかせ給う。古の賢人なり、今の人のかがみ

こんど 殊 み 慎 たも

なり。されば、今度はことに身をつつしませ給うべし。

しじょうきん ごごしよ

(212 四条金吾御書

げんどう ふ ま

言動・振る舞い 1599 ページー12行)

くしいちごん じゅうぶんかんが はな しゅうこうたん

孔子は九思一言（十分考えてから話すこと）といい、周公旦

きやく く かみ あら とき ちゅうし さんど むか

は客が来れば髪を洗っている時でも中止して三度も迎え、

しよくじちゅう くち なか しよくもつ は きやく ま

食事中であつても口の中にある食物を吐いてでも客を待たせず

さんど たいおう むかし けんじん いま ひと かがみ

三度も対応しました。それが昔の賢人であり、今の人たちの鏡

です。
したがって、
今度からはよくよく自重じちようしていきなさい。
こんど

おうな 類

女るいは、いかなる失ありとも、一向に御きようくんま

とが

いっこう

ご

教

訓

でもあるべからず。ましていさかうことなかれ。

諍

しじようきんごごしよ

(212 四条金吾御書

げんどう

ふ

ま

言動・振る舞い

1600

ページー11行)

師曠しこうが耳みみ・離婁りろうが眼まなこのように聞き見きみさせ給えたま。

（258 椎地しいじ四郎殿御書のしろうどのごしよ）

言動げんどう・振る舞ふまい
1720 ページ 7 行

言

いうにかいなきものなれども、

者

やくそく もう

約束と申すことはたがわぬ

違

そうろう

ことにて 候

うえのどのごへんじ

301 上野殿御返事

だいなんひつじよう

（大難必定の事）

こと

げんどう

言動・

ふるま

振る舞い

1843

ページー8行

とも 合 れい
友におうて礼あれとは、友達の一日に十度二十度来れる人
なりとも、千里二千里来れる人のごとく思うて、礼儀いさ
疎 おも
さかおろかに思うべからず。

305 上野殿御消息 (四徳四恩の事)

うえのどのごしようそく しとくしおん こと
げんどう ふ ま
言動・振る舞い 1850 ページ 14 行

劣おとれる者ものに慈悲じひあれとは、我われより劣おとりたらん人ひとをば我わが子こ
のおもごとく思おもつて、一切いっさいあわれみ、慈悲じひあるべし。

305 上野殿御消息 (四徳四恩の事)

言動・振る舞い 1850 ページ 16 行

めした 目下めしたのものに者ものに慈悲じひあれとは、自分じぶんよりも劣おとっているすべての人ひとびと
たい 対たいしては、我わが子このよう思おもつて、慈悲じひの心こころで差別さべつせず情じょうを
かけていくべきです。

わざわいは口より出でて身をやぶる。さいわいは心より
禍 くち い み 破 幸 出 われ 飾
いでて我をかざる。

（390 十字御書 むしもちごしよ）

言動・振る舞い げんどう ふ ま
2037 ページ 5 行

わざわいというのは自分の言葉から起きて、身をほろぼすもので
じぶん ことば お み
こうふく こころ しんじん はっ じぶんじしん
す。幸福は心（信心）より発して、自分自身をかざっていくので
す。

でんぎようだいし おんしやく

せんだつさいぎよ

志

りんう

伝教大師の御釈に云わく「川瀬祭魚のころざし、林鳥

ふそ しよく つう

きゆうごうさんし

れい

こうがんつら

みだ

父祖の食を通ず。鳩鴿三枝の礼あり、行雁連を乱らず、

こうよううずくま

ちち

の

いや

ちくしやう

れい

し

羔羊踞つて乳を飲む。賤しき畜生すら礼を知ること、

なん

じんりん

れい

かくのごとし。何ぞ人倫においてその礼なからんや」とあ

しゅい

そばされたり〈取意〉。

にいけごしよ

（400 新池御書

げんどう

ふ

ま

言動・振る舞い

2069

ページー6行